

続覚え書き、危機における人間像 —Xenophontis, *Historia Graeca*, II, iv—

藤 澤 郁 夫*

(平成6年4月18日受理)

要 旨

ペロポネソス戦争の敗戦処理という危機の時代に幾人かの政治指導者が現われた。本論では特に民主派の首魁としてアテーナイを寡頭派の圧政から解放に導いたトラシュブーロスを取り上げる。パウサニアス王による和解策が打ち出されるまでの彼の言動を一応追ったあとで、彼の二つの演説を手がかりに、「汝自身を知れ」というギリシア伝来の寸言 (brachylogia) がどのように解釈されているかを検討する。言い換えると、トラシュブーロスにおける自己認識の仕方 (hotropos) が検討される。

KEY WORDS

politeia	国制	demos	民衆
aparche tes sophias	知恵の初穂	gnothi sauton	汝自身を知れ

1 トラシュブーロスの登場

テラメネス処刑後、いまや三十人は恐れることなく専制政治 (tyrannein) を行なえた⁽¹⁾。登録されていない人々 (hoi exo tou katalogou) は市域への立ち入りを禁止され、一旦はペイライエウスに逃れたものの、その多くはメガラとテーバイに亡命したから、メガラとテーバイは逃亡者 (hoi hypochorountes) で溢れた、とクセノフォンは伝える⁽²⁾。まもなく、およそ七十人の軍勢とともにトラシュブーロスはテーバイを出発、強力な砦の地 (chorion ischyron) ピュレーを占領した⁽³⁾。この軍勢のなかに後日トラシュブーロスを弾劾告訴することになるアルキノスが含まれていたとは実に皮肉なことである。「コイレー区のアルキノスはステイリア区のトラシュブーロスを違法提案の科で (grapsanta ti para tous nomous) 告訴した。アルキノスはトラシュブーロスと一緒にピュレーから帰還した仲だったのに、トラシュブーロスを有罪に陥れたのだった (heile)⁽⁴⁾。」この事件については追ってまた触れるであろう。

およそトラシュブーロスの事績を肯定的に、つまり、三十人寡頭政の打倒という功績を彼に帰すのは当時のアテナイ市民の一般的風潮であったかと思われる。なぜなら、アイスキネス自身がトラシュブーロスについて次のように言及しているからである。「つい最近、彼によってポリスに対する功勞 (ton euergesion) があったばかりである⁽⁵⁾」と。これが後代の作家になるとさらにその口吻は昂まる。コルネリウス・ネポスは言っている。「およそ徳性 (virtus) が命

* 社会系教育講座

運 (fortuna) ぬきに考えられるべきならば、私はこの人物を第一級の位置 (primum omnium) におくべきだろう。なぜなら、その誠実 (fides) において、徹底 (constantia) において、魂の偉大 (magnitudo animi) において、祖国愛 (in patriam amore) において、疑いなく私は誰よりもこの人物を優先させるからである⁽⁶⁾。」こうした後代の評価は、とりわけ彼が三十人寡頭派の圧政と隷属から「祖国を解放した (patriam liberare)⁽⁷⁾」という功績を念頭においているからであり、ここで解放 (liberare) とは「自由の確保 (in libertatem vindicaret)⁽⁸⁾」の謂いである。

ともあれ、トラシュブーロス軍のピュレー占領の報をうけて、三十人は速やかに三千人と騎兵を引きつれて (syn tois hippeusi) 当地に駆けつけたが、なすところ何もなく引き返さざるをえなかった⁽⁹⁾。この後も三十人、つまり市域の軍勢は、兵糧攻めで応戦したものの、猛吹雪 (chion pamphlethes) にも遮られて、引き返すのがやつの体⁽¹⁰⁾。いっぽうピュレーの軍勢はいまや七百人に膨れあがっていた⁽¹¹⁾。こうしてその後の戦闘においてトラシュブーロス軍は市域のホプリーテースを百二十人以上殺害している⁽¹²⁾。兵士たちの亡骸は親類縁者が収容したとクセノフォンは伝えている⁽¹³⁾。

このように戦況はトラシュブーロス軍に有利に展開、もはや三十人寡頭派の身の安全を保障するなものもなかった。ここに三十人寡頭派のエレウシス占領の狙いがあり、それはまさに「必要のときには彼らの避難先 (kataphyge) とするため⁽¹⁴⁾」であった。このエレウシス占領の模様をクセノフォンは次のように伝える。「クリティアス他の三十人は騎兵に同行を命じてエレウシスにやってきた。騎兵が警護するなかで、エレウシスには何人の人間がいて、どれだけの警備が必要かを把握したい旨の宣言をしたうえで、調査 (exetasis) に着手、全員に対して登録 (apographesthai) を命じた。登録をすませた人々は、各々エレウシスの市門を通過して海の方に向かって進まねばならない。三十人は市門の両側の海岸に (epi de toi aigialoi) 騎兵を待機させると、門から出てくる連中をつぎつぎと従者が縛りあげた。こうして登録ずみの人々全員が捕えられると、三十人は騎兵隊長のリュシマコス (Lysimachon ton hipparchon) に彼らをアテナイ (の市域) に連行してヘンデカ (警務委員) に引き渡すよう命じた⁽¹⁵⁾。」かくして、ひとまずエレウシスは寡頭派の避難先として確保されたのである。

この事件があった翌日、オーデイオンに集結した騎兵を前に、クリティアスは次のように訴えた。「諸君、我々がこの国制 (politeia) (寡頭派) を樹立したのは我々自身のためだけではなく諸君のためでもあるのだ。従って、諸君は名誉とともに危険も分かち合わねばならない。諸君は逮捕されたエレウシスの住人を有罪としなければならないだろう。それは、諸君が我々と同じことを信じ、同じことを恐れるためである⁽¹⁶⁾。」この演説が完全武装 (exoplismenoi) のラコニアの守備兵が見守るなかで行なわれたことも記憶に留めたい⁽¹⁷⁾。

2 トラシュブーロスの第一演説

ピュレーのトラシュブーロス軍はいまや千人の規模に膨れあがった。トラシュブーロスは夜陰に乗じて軍勢をペイライエウスに移動させる。三十人寡頭派もこの事態をうけてラコニアの守備兵および市域の騎兵とホプリーテースをペイライエウス救援に向かわせる⁽¹⁸⁾。トラシュブーロス軍は、ペイライエウスを囲む城壁全体を守備するには「味方は十分ならず」と判断、

ムニキアの丘に (epi ten Mounichian) 集結した (synespeirathesan)⁽¹⁹⁾。市域からの軍勢は、最初、ヒッポダモスのアゴラに向かって (eis ten Hippodameion agoran)⁽²⁰⁾進軍したが、最終的にはムニキアの丘のアルテミス神殿およびペンディスの聖域に通じる道を埋め尽くした。隊列の深さ五十列をくだらぬ軍勢がムニキアの丘に進軍したとされる⁽²¹⁾。

いっぽうピュレーから帰還したトラシュブーロス軍も道を埋め尽くす (anteneplesan) 程の軍勢を擁したと報告されているものの⁽²²⁾、ホプリーテースの深さは十列より多くはなかったとされる⁽²³⁾。後続したのは軽装歩兵 (peltophoroi)、軽装の投げ槍兵 (psiloi akontistai) および投石兵 (petroboloi) で、これら軽装兵のなかには当地の人間 ([hoi] autothen) も加わっていたとされる⁽²⁴⁾。

市域の軍勢はラコニアの守備兵と騎兵、加えてピュレーからの帰還軍のおよそ五倍の重装歩兵を擁したのであれば、トラシュブーロス軍の劣勢とクリティアス軍の優勢は明白であるかに見えた。そして、それがまたトラシュブーロスの判断でもあった⁽²⁵⁾。トラシュブーロスの第一演説はこうした状況下で行なわれたのである。

「市民の諸君、諸君のうちのあるものには伝えたいしあるものには思い起こして欲しい。向かって右翼に陣取って進軍してくるのは、四日前に諸君が敗走させ追いかけた連中である。いっぽう最左翼を陣取っているのが三十人である。この連中は何も悪事をはたっていないのに (ouden adikountas) 我々からポリスを奪い、我々を家から追い出し、我々にとってもっとも親しい者達を追放した (apesemainonto) のである。しかし、みるがいい。彼らの予期しなかった事態になっている。我々はずっとこういう事態を願ってきた (euchometa) のだ⁽²⁶⁾。

「我々はいまや武器を手にして彼らと対峙している。我々は、食事中に、就寝中に、そしてアゴラでの売買の最中に逮捕されたが、決して我々は悪事をはたっていないばかりか、一時滞在の外人でもない (oud' epidemountes) のに追放の身にある (ephygadeuometha) のだから、いまや明らかに神々は我々の味方になっている。なぜなら、神々は、折しも我々が有利になる時に無風に (en eudiai) 嵐を (cheimona) を起こし、折しも我々が攻撃に出た時に多勢に無勢の我々に勝利を与えたからである⁽²⁷⁾。

「なおまた神はこのような場所に我々を導いた。相手側は昇り坂 (eis to orthion) のため先頭の兵士を越えて投げ槍を投げられないが、いっぽう我々は下り坂 (eis to katantes) のため槍 (dorata) でも投げ槍 (akontia) でも石 (petrous) でも投げさえすれば相手に届き、多くの連中を負傷させることになろうからである⁽²⁸⁾。

「諸君のなかには相手方の先頭集団と対等に戦わねばならぬと思っている人もいよう。しかし、もし諸君が懸命に——むろんそうあるべきだが——飛道具 (bele) を投げれば、道路は敵でいっぱいだから誰も失敗することはないだろう。相手側は丸盾の下に (hypo tais aspin) 隠れてそれを避けようとするだろう。だが、そうなれば盲人を相手にするも同然、どこでも思いどおりの場所で彼らを傷つけ、突進してくる連中を倒すことができよう⁽²⁹⁾。

「諸君は各々自分こそがいちばん勝利に貢献したと自信がもてるよう (heautoi syneisetai) 振る舞うべきだ。なぜなら、神の御心にあらば、勝利 (nike) は我々にあり、神は我々に祖国を (patrida)、家を (oikous)、自由を (eleutherian)、名誉を (timas)、そして子供のある者には子供を (paidas)、妻のある者には妻を (gynaikas) 返すであろうからである。我々のうちで勝利をえて最快の日を迎える人は幸福である (makarioi)。たとえ死ぬ人があっても、彼は幸福である (eudaimon)。なぜなら、どんな金持ちもこれほど美しい記念碑 (mnemeion kalon)

はもてないだろうからである。時がきたら戦闘開始の合図をする。エニューアリオス(Enyalios) (突撃)と呼び掛けたら、我々全員が心を一にしてこれまでにうけた暴力の仕返しに連中に復讐しようではないか⁽³⁰⁾。」

トラシュブーロスはいこう語って敵に向き直った。一人が殞れるか傷つくまでは攻撃をしてはならぬと命じた予言者自らが、あたかもある種の運命に導かれているかのように先頭に飛びだして(ekpedesas)死を遂げると、いよいよ戦闘が始まった⁽³¹⁾。トラシュブーロス軍は勝利をおさめ、敵を平地まで(mechri tou homalou)追跡した。この戦闘で、三十人のうちではクリティアスとヒッポマコスが戦死、また、ペイライエウスの支配者となっていたグラウコン(一世)の息子カルミデス他七十人の戦死者が出た⁽³²⁾。因みに、カルミデスは哲学者プラトンの伯父、クリティアスはプラトンの母の従兄にあたる。ともあれ、かくして戦死者の遺体収容のために休戦協定が結ばれ(tous nekrous hypospondous apedidosan)、双方の戦士たちは互いに歩み寄って言葉を交わし合った(dielegonto)のであった⁽³³⁾。

3 クレオクリトスによる平和の訴え

休戦協定の折、エレウシスの密儀への入信を許された者たちの使者(ho ton myston keryx)クレオクリトス(Kleokritos)が派遣されて、市民を前にして次のように訴えた。この演説は東の間の休戦協定を介して挿入された宗教者による平和論の垂範といった趣きがある。

「市民の諸君、なぜ諸君は我々を(エレウシスから)追い出すのか。なぜ諸君は我々を殺そうとするのか。我々の方は諸君に一度たりとも危害を加えたことはない。我々は諸君とともにもっとも厳かな聖儀、犠牲の儀式(thysia)、立派な祭り、ダンスを共にし、ともに学校へ通った仲であり(symphoitetes)、兵士仲間(systratiotes)となっていたのではないか。諸君と一緒に陸海を問わず我々双方の共通の安全(soteria)と自由(eleutheria)のために数々の危険を我々は冒してきたのだ⁽³⁴⁾。

「父と母の神にかけて、同族の誼にかけて、婚姻関係にかけて(kedestias)、互いの親交にかけて(hetairias)——というも、我々の多くはみなこうした絆を共有しているからだが——神々と人間に恥じて祖国に罪を犯すのは止めてもらいたい。不信仰きわまりない三十人に従ってはならない。この三十人は私欲のために(idion kerdeon heneka)、八ヶ月の間に、ペロポネソス側が十年の戦争中に殺した人数にほぼ匹敵する程の人間を殺したのだ⁽³⁵⁾。

「平和のうちに(en eirenei)市民生活をおくこと(politeuesthai)もできたものを、この三十人は、この上なく恥辱にみちた、苛酷で不信仰で、神にも人間にももっとも憎まれるべき戦争を我々に仕掛けてきたのだ。しかし、それでもなお、いまや我々の手にかかって死んだ者のうちの幾人かに対しては、諸君のみならず我々もまた悲嘆の涙にくれていることを、諸君にはよく承知してもらいたい⁽³⁶⁾。」

ここでは、三十人寡頭派の企てが「私欲のため」と総括され、やがてトラシュブーロスがまったく同じ趣旨の総括をすることになる。ともあれ、生き延びた寡頭派の指揮官たちは、部下たち(hoi meth' heauton)がこうした演説を聴いたこともあって、彼らを市域に連れ戻したのであった⁽³⁷⁾。

4 トラシュブーロス、イソテレイア (isoteleia) を約す

翌日、いまや意気沮喪孤立した (tapeinoi kai eremoi) 三十人は会議場に集結した⁽³⁸⁾。三千人の市民からなる分隊 (tetagmenoi) のあるところ、どこでも相互に意見の対立が起きた。なぜなら、我が身に寡頭派の暴力に加担した覚えのある者は恐怖を感じて、ペイライエウス軍(トラシュブーロス軍)に対する徹底抗戦を主張したし、いっぽうなんら加害など身に覚えのない者は、今次の災難には一切責任なしと自ら思量し、かつまた、他人にもそう触れ込んだために、彼ら市民の間で疑心暗鬼を生じたからである。こうして市域にあった寡頭派内部に亀裂が入り、寡頭派から離反した連中は、三十人への不服従を誓い、三十人によるポリスの壊滅を黙認 (epitrepein) できずと主張、結局、三十人の追放を投票決議のうえ、各部族から一名都合十名 (heilonto deka, hena apo phyles) ——仮にこれを十人委員会と呼んでおく——を選出、暫定的に市域の秩序維持に当たったのである⁽³⁹⁾。かくして、アテナイの権力構造は三つに分極化した。

さて、三十人寡頭派はエレウシスに退き、いっぽう十人委員会の方は、騎兵隊長らの協力をえて (syn tois hipparchois)、相互不信と混乱の極致にあった市域の人々を監督した⁽⁴⁰⁾。アクロポリス南東のオーデイオンでは、騎兵たちがペイライエウス軍の襲撃に備えて寝ずの番をしたし、長城にそって絶えず騎兵によるパトロールが繰り返されもした⁽⁴¹⁾。

いっぽうペイライエウスのトラシュブーロス軍はこの頃多勢 (polloi) となり、ありとあらゆる種類の人々 (pantodapoi) が彼の許に集まっていた⁽⁴²⁾。彼らは、あるひとは木製の、あるひとは枝編み細工の、武具制作に携わっていたのだが、それらはいずれも白く塗られる習慣があった。十日が過ぎないうちに、多くのホプリーテースと多くの軽装歩兵 (gymnetes) が先発隊として出発したのだが、その際次のような保証を与えた (pista dontes)⁽⁴³⁾。すなわち、「誰であれ我々と共に戦う (sympolemeseian) 者は、たとえその者が外人 (xenoï) であろうと、イソテレイアがあるべし⁽⁴⁴⁾」。一見、保証授与の主体はホプリーテースと軽装歩兵の先発隊であるかのように読めるが、しかし、それはこれら民主派の棟梁としてのトラシュブーロスと解されるべきで、事実彼は、ピュレーから共に帰還した友人アルキノスによって、後日この約束が違法提案であるとの嫌疑をかけられ、告発のうえ結局有罪に追い込まれることになるのである。「違法弾劾は政敵同士の間にかぎらず友人同士の間でも、もし友人がポリスに対して何か違反をしたときは (ti examartanoien) 提訴されるのである⁽⁴⁵⁾」とはアイスキネスの台詞だが、イソテレイアの約束がトラシュブーロスの失脚に繋がったことは歴史的事実としなければならない。いづれにせよ、ペイライエウスに結集した民主主義者のうちに、この約束に加担した人々がいたことは、注目に値しよう。またこの段階で、一貫して市域で活躍していた騎兵がおよそ七十騎ペイライエウス軍に加わっている点も、市域の混乱と戦況の推移を伝える逸話として大いに注目されよう⁽⁴⁶⁾。

5 パウサニアス王の登場

この頃になると市域からの攻撃は途絶え、わずかに騎兵の活動が散見されるにすぎない。兵

糧調達のためにアイクソネー (Aixone) 区の人々の畑に向いたおり、騎兵長官リュシマコスがアイクソネー区の人々を斬り殺す (apesphaxe) という事件が起こった⁽⁴⁷⁾。ペイライエウス軍は仕返しにレオンティス部族の騎兵カッリストラトス (Kallistratos) を郊外で捕縛のうえ殺害するのである⁽⁴⁸⁾。この頃ペイライエウス軍は自信を深め、市域の城壁に攻撃を加えたばかりか、彼らによる市域内部への侵攻も懸念される状況となった。この間の事情を伝えるエピソードとして、市域の住人のある機械制作技師 (mechanopoios) は、ペイライエウス軍がリュケイオンからの遊歩道に沿って仕掛けを運ぼうとしているのを知って、荷車に積むほどの大石を置いて敵軍を阻止しようとした、とクセノフォンは伝えている⁽⁴⁹⁾。

エレウシスの三十人と登録されていた市域の者たちは、民衆 (ho demos) がラケダイモン人から離反した (aphestekotos) ことを理由に、救助を要請するべくスパルタに使節 (presbeis) を送る⁽⁵⁰⁾。この要請はスパルタの將軍リュサンドロス (Lysandros) の容れるところとなった。陸海からの包囲網により兵糧が断たれる (apokleistheiesan) とペイライエウス軍は降伏するだろうとの情勢判断から、使節に百タラントンの貸与 (daneisthenai) が約束された⁽⁵¹⁾。リュサンドロス自身も陸上での監督官 (harmostes) として指揮にあたるためアテナイに赴き、また彼の兄弟のリビュス (Libys) も艦隊司令官 (nauarcheon, or nauarchos) として派遣される運びとなった⁽⁵²⁾。こうしてリュサンドロスはエレウシスに赴いてペロポネソス側のホプリーテースを集め、いっぽう艦隊司令官リビュスは海上監視によりペイライエウスに一切の兵糧が入港しないように (hopos meden eispleoi) 計らった⁽⁵³⁾。その結果、ペイライエウス軍はほどなく困難に陥る (aporiai esan) いっぽう、市域の人々はこのリュサンドロスの作戦に勇気づけられて自信を取り戻すのである⁽⁵⁴⁾。

こうした事態の推移を見て、パウサニ阿斯王 (Pausanias ho Basileus) はリュサンドロスを嫉妬したと伝えられる。計画の成就によってリュサンドロスの名望は高まり、ほどなくアテナイは彼によって私物化されると懸念されたからである。こうしてパウサニ阿斯王は三人のエフォロスを説得、遠征軍 (phroura) を率いて出陣した⁽⁵⁵⁾。これにボイオティアとコリントスを除くすべてのペロポネソス同盟軍が賛成した。当初、ボイオティアとコリントスはアテナイになんら協定違反 (paraspondos) の事実がないことを理由に参戦に応じなかったものの、ラケダイモン人によるアテナイの領土獲得が現実性を帯びてくる戦況を見定めるや、一転して参戦に応ずるのである⁽⁵⁶⁾。機を見るに敏と言うべきであろう。こうしてパウサニ阿斯王はペイライエウス付近の通称ハリペドン (halipedon) と呼ばれる砂浜に野営する。彼自身は右翼の指揮 (dexion keras) に当たり、いっぽうリュサンドロスは傭兵 (misthophoros) とともに左翼の指揮 (to euonymon [sc. keras]) に当たったのである⁽⁵⁷⁾。

パウサニ阿斯王は使節をペイライエウス軍に送り、各々が自分の家に (epi ta heauton) 退去するよう命じた。しかし、ペイライエウス軍の聞き入れるところではなかった。パウサニ阿斯王は喚声のみによって攻撃を装ったものの、実力行使には及ばず、翌日、ラケダイモン人の歩兵二隊とアテナイの二部族の騎兵を引きつれ、静かな入江 (kophos limen)、つまり、ムキニアに向かったのであった⁽⁵⁸⁾。

さて、パウサニ阿斯王がムキニアの入江に引き返した折、敵兵に狙撃されるという事件が発生、これに怒った王は騎兵を全速力で (enentas) 追撃させ、初年歩兵に後を追わせるという事態となった⁽⁵⁹⁾。自身も追跡のうえ、およそ三十人の軽装兵を殺し、残りの者たちもペイライエウスの劇場 (to Peiraioi theatron) に追いつめた。たまたまそこでペイライエウスの軍勢のう

ちのすべての軽装兵および若干のホプリーテースが完全武装をしていた⁽⁶⁰⁾。軽装兵がすぐに出撃(ekdramontes)、槍を投げ石を投げ矢を放ち投石器を用いて石を投げた⁽⁶¹⁾。ラケダイモン人は圧倒されて対面しつつ後退したため、これに勢いづいたペイライエウス軍はいよいよ激しく攻め立てた。ためにスパルタの二名の軍団長カイローンとティブラコス、オリピックの勝利者ラクラテス(Lakrates)他が戦死、これらはケラメイコス(Kerameikos)の城門の前に埋葬された⁽⁶²⁾。

この事態を見て取ったトラシュブーロスと他のホプリーテースは応援に駆けつけ、すみやかに味方前方に八列の隊列を整えた⁽⁶³⁾。パウサニ阿斯王は圧倒され、山の背(lopchos)の方へ四ないし五スタディオン後退した⁽⁶⁴⁾。危険を悟ったパウサニ阿斯王はここでラケダイモンと同盟国に自分への応援を要請する伝令を送る。いまや味方の応援を加えたパウサニ阿斯王は甚だ厚い隊列を組んで反攻に出た。アテナイ側の軍勢、トラシュブーロス軍はこれを迎え撃ったものの、この戦闘によってあるものはハライ区の泥土に押しやられ、あるものは逃亡し、あるものは戦死(およそ百五十人)する事態となった⁽⁶⁵⁾。

6 パウサニ阿斯王による和解案

そこでパウサニ阿斯王は勝利の碑を立て、野営地ムニキアの入江に引き返した⁽⁶⁶⁾。こうした戦闘があったにも拘らず、パウサニ阿斯王はトラシュブーロス軍に憤怒の情を示さず、却って密かに(lathrai)使者を送りペイライエウス軍に次のような教示を行なった。「ペイライエウス側は王とエフォロイのもとに使節(presbeis)を送ること。この使節は王に対してどのようなことを上申すべきかということ⁽⁶⁷⁾。」ペイライエウス側はパウサニ阿斯王によるこの和解案を受諾した⁽⁶⁸⁾。

いっぽう王は市域の人々(hoi en toi astei)を分割して、可能なかぎり多数の者が自分の許に結集するように命じた⁽⁶⁹⁾。次いで以下の和解案が指示された。「市域側とペイライエウス側が戦闘に入るといふ恐怖を抱くには及ばないこと。市域の人々とペイライエウスの人々はともども和解のうえ(dialythes)ラケダイモン人たちと友好関係に入る(philoieinai)べきこと⁽⁷⁰⁾。」この和解案に対してアテナイ側はすすんで使者を送ったとクセノフォンは伝えている⁽⁷¹⁾。すなわち、ペイライエウス側の使者はラケダイモン人との休戦協定(spondai)を携えた⁽⁷²⁾。いっぽう市域からは、先ず私人の資格(idiotai)でケーフォソーンとメレトスが送られたが⁽⁷³⁾、市域で公権力にあった人々(hoi apo koinou ek tou asteos)からもその後使節が送られている⁽⁷⁴⁾。まず市域から提出された和解の条件はこうである。「現在配下にある長城(ta teiche)と彼ら自身を無条件で差し出す用意があること(無条件降伏)。その代わりペイライエウス側もラケダイモン人と友好関係に入りなければペイライエウスとムニキアを引き渡すべきこと⁽⁷⁵⁾。」

スパルタ在住のエフォロイと民会はこれら双方の和解案を聴取、検討のうえ、十五人の使節をアテナイに送り、可能なかぎり最善の方法でパウサニ阿斯王と協力のうえ和解するように彼らに指令を下した⁽⁷⁶⁾。その結果、アテナイ側は次のような条件で和解に応じた。「相互に対して和平(eirene)があるべきこと。各々は各々の家(epi ta heauton)に戻るべきこと。ただし三十人、ヘンデカ(刑務委員)、およびペライエウス在住の人々に対して権力を行使した十人(ton en Peiraiei arxanton deka)についてはその限りでない。市域にある者のうちで恐怖感を抱い

ている者は、エレウシスに居を定めることが望ましい⁽⁷⁷⁾。」

7 トラシュブーロスの第二演説

かくして和解が成立、パウサニアス王はその遠征軍 (to strateuma) を解散した⁽⁷⁸⁾。いっぽうペイライエウスの軍勢は武装を解かず、そのまま海岸地ペイライエウスから中心地アクロポリスへと上り (anelthontes)、アテナ女神に犠牲を捧げたあと、アクロポリスから下りてきたところで将軍たちが集会を開いた⁽⁷⁹⁾。以下の演説はその集会においてトラシュブーロスが市域の市民に訴えて行なったものである。

「市域の諸君 (o ek tou asteos andres), 私は諸君に進言したい (symbolouleuo)。諸君は諸君自身を知るべきだ (gnonai hymas autous [sc. gnothi sauton])。そもそも我々を支配しようなどという諸君の自惚れた企てに、どんな根拠があるか (epi tini) を検討する (analogisaisthe) ことが、諸君自身を知る最上の方法なのである (malista d'an gnoiete)。それとも諸君のほうがより正義に適っているとでもいうのだろうか。民衆 (ho demos) はなるほど諸君よりも貧しい (penesteros) けれども、これまで金銭のために (heneka chrematon) 諸君に不正を加えたことは一度もないのだ。ところが、いちばん富貴に恵まれていながら (plousioteroi panton ontes) 諸君ときたら私利私欲のために (heneka kerdeon) 数々の醜いこと (polla kai aischra) を行なってきたのだ。諸君に正義 (dikaiosyne) を名乗る資格がないとしたら、考えても欲しい、どうして諸君は勇気を自慢できようか (ara ep' andreiai hymin mega phroneteon)⁽⁸⁰⁾。

「この点については、我々が互いに戦ってきたという事実以上にすぐれた判断規準 (krisis) が何かあるだろうか。諸君は長城 (teichos) を有し、武器や資金にも恵まれ、かつまたペロポネソス諸国を味方に (symmachous) つけておきながら、何ひとつそうしたものをもたない我々に (hypo ton ouden touton echonton) 負かされたのだ。それでもなお諸君は思慮 (gnome) において勝る (prochein) と言い張るのだろうか。それとも諸君はラケダイモン人たちを自慢できるとでも思っているのだろうか。どうしてそんなことができようか。なぜなら、ちょうど咬みつく犬に頸輪をかけ縛りあげ、そうしておいて飼い主に引き渡すように、彼らラケダイモン人たちは、我々に不正を加え (咬みつい) た諸君を (頸輪をかけ縛ったうえて) 我々に引き渡してこの国を出ていったからである⁽⁸¹⁾。

「しかし、だからといって諸君の誓ったことを破棄せよとはいささかも要求しない。むしろ諸君に要求したいのは、他の美德に加えてなおこの美德 (to kalon), すなわち、諸君が誓いを守る人々であるとともに敬虔な人々でもある (euorkoi kai hosioi) ことである⁽⁸²⁾。」

トラシュブーロスは以上のことに加えて、これ以上の混乱を引き起こす (tarattesthai) 必要はまったくなく、ただこれまでの法律に (tois nomois tois archaiois) 従えばよいことを述べて、その集会を後にした⁽⁸³⁾。

かくしてパウサニアス王による和解策は一応功を奏したように見える。しかし、その後も小規模ながら内紛がなかった訳ではない。エレウシスに逃れた三十人寡頭派の残党が傭兵を駆使して謀反の企みありとの報が届くと、民衆は一丸となって (pandemei) 出兵し、エレウシス側の将軍を殺害するといった事件も起きているからである⁽⁸⁴⁾。しかし、その後友人や血縁者が彼らに和平に応じるように説得、過去の怨恨を持ち越さない (me mnesikakesein) との誓いが立

てられ、エレウシスの人々と市域の人々は共に政治を行なう状況に復したのである⁽⁸⁵⁾。

以上、駆け足で史実を辿ってきたが、事態のこれら一連の進行のなかで、トラシュブーロスの言動から窺われる彼の行動規範ないし原則といったものについて、以下、すこしく探ってみたい。

8 知恵の初穂の奉納、トラシュブーロスの場合

一種のラコニア風の寸言 (brachylogia tis Lakonike) 「汝自身を知れ (gnothi sauton)」という題目が知恵の初穂 (aparche tes sophias) としてアポロン神に奉納されたのは、それがまさに古来からの知恵の愛し方 (ho tropos philosophias) だったからである。自己知の問題をこのように喝破したのはプラトンであった⁽⁸⁶⁾。いわばこうした珠玉の寸言は知恵の初穂であるから、我々人間が直接食することは畏怖されるのであって、さしあたって我々はそれを奉納するという市民的日常の敬神を通じてせいぜいそれを愛しうるにすぎない。しかし、知恵の一見消極的なこの端緒は、愛知という契機を非日常の神秘的ないし特権的な特殊専門集団の方言に自閉させることなく、あくまでもそれを日々の日常に送り返すとう積極面をもっていることに注意したい。この場合、敬神は生活の特殊な次元ではなく市民生活の一部である。

トラシュブーロスが歴史に刻んだ事績を精確に評価することは筆者の能力を超える。ここではプラトンのいう愛知の方法、ないし、知の愛し方という構図のなかで、トラシュブーロスがいかように知恵の初穂をアポロン神に奉納したかを、彼の二つの演説を手がかりに検討してみたい。

敬神が日常的市民生活の一部として検証される次第は、トラシュブーロスの場合にも事情は大して変わらない。例えば、彼の第一演説において、戦士として神々の加護を祈るといった敬神は、まったくもって平均的市民生活の一部であろう。また彼の敬神は、なんら悪事をはたらいていないという道徳的な信念と、一時滞在の外人でもないのに多くの者が国外追放に処せられているという寡頭派の不正義に対する義憤を抛り所に、自らの正義を推論し、なおそれを確信しようとする彼の決意が「神々は我々の味方になっている」という表現をとるという端的な事実のうちにも示されていよう⁽⁸⁷⁾。あるいは、たんに語法上のこととはいえ、根本価値の実現は神からの下賜として語られるのである。すなわち、それら根本価値のために最善を尽くすことは人間の力のうちにあるとしても、しかし、勝利 (nike)、祖国 (patris)、家 (oikos) および自由 (eleutheria) といった人間的努力の収斂点としての至高の価値は最終的には神々から下賜されるという「言語的形式」を踏むのである⁽⁸⁸⁾。これもまた敬神の一形式である。しかも、それら至高の価値のために死を賭して戦うことは、同時に美しい記念碑 (mnemeion kalon) ともなるのであってそういう生き方のできる人間は幸福だ (makarios, eudaimon) とも言われている⁽⁸⁹⁾。

こうして、トラシュブーロスにおいて「汝自身を知れ (gnothi sauton)」という知恵の初穂が奉納される図柄が見えてくる。言い換えると、彼の知恵の愛し方 (ho tropos philosophias) がその姿を表してくる。「諸君は諸君自身を知るべきだ (gnonai hymas autous)」と彼の第二演説はまず訴える。この課題は根拠 (epi tini) を検討すること (analogizesthai) によって解決可能となる⁽⁹⁰⁾。何の根拠か。支配ないし権力 (archein) の根拠である。では支配ないし権力を

根拠づけるものは何であろうか。それは正義 (dikaiosyne) だと言われている⁽⁹¹⁾。つまり支配ないし権力の正義・正当性が問われている。ところで権力が担われるものであるかぎり、権力の正義を担う主体も存在するはずである。むしろその後の理説を先取りしてプラトンの哲学者王の理想を引くまでもなく、支配や権力の正当性を担い実現する主体は単独者 (individuum) であるという考え方、言い換えると、哲学者と王は一体化すべきだという理念、において機能している国制概念としての王制 (basileia) もまたその有力な一つの回答となるであろう。しかし、トラシュプーロスにおいては、正義を担い正義を実現する主体は民衆と貴族層という二分法によって発想されている。ところで民衆 (ho demos) の属性は「貧しいこと (penesteros)」であるが、もう一方の貴族層 (kaloi k'agathoi) の属性は「富貴に恵まれていること (plousioteroi)」である⁽⁹²⁾。トラシュプーロスによれば民衆は金銭のために (heneka chrematon) 不正を働くことはないのだけれど、貴族層は私利私欲のために (heneka kerdeon) 数々の醜いことをしたというのである。この認識は、寡頭派が「私的な利益のために (idion kerdeon heneka)」数々の悪政を行なったと訴えた先のクレオクリトスのそれに見事に符合する。従って、一見単純でナイーフとも見える二項対立の図式は、トラシュプーロスだけに孤立的な個人言語なのではない。

この議論そのものの妥当性はいまは問わない。むしろ我々にとって印象的なのは、この立論の妥当性が「相互の戦い (epolemesamen pros allelous)」という次元に還元されている点である⁽⁹³⁾。支配ないし権力の正当性の根拠の探求 (analogizesthai) という認識問題が、戦いという実践の水準で判断 (krisis) されたという点である。煎じつめれば、認識ないし思慮 (gnome) の正当性の判断規準 (krisis) は戦いの勝敗だということになろう⁽⁹⁴⁾。こういう認識は内戦という危機の時代の軍人の発想にその根があるのだ、と言ってしまえばそれまでだが、自己知の問題が現実主義的に解釈された事例として記憶に留めたい。

トラシュプーロスの立論を整理しよう。寡頭派は言うに及ばず我々もまた自分自身を知るべきだ。しかるに自分自身を知るとは支配ないし権力の正当性の根拠の吟味 (analogizesthai) という紆路を歩むことに他ならない。支配ないし権力の正当性を自己主張し合う認識ないし思慮 (gnome) は、正当性の最終的判斷規準 (krisis) を戦いの勝敗という次元に求めなければならない。かくして彼の場合、「汝自身を知れ」という知恵の初穂は、敬神のうちで正義の実現のために戦うことによって奉納され、そういう仕方では知恵の愛し方 (ho tropos philosophias) が示された、と言えよう。(1994. 4. 7.)

注

- (1) Xenophon, *Hellenica (Historia Graeca)*, II, iv, 1.
- (2) *loc. cit.*
- (3) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 2.
- (4) Aeschines, *Against Ctesiphon*, 195.
- (5) *loc. cit.*
- (6) Cornelius Nepos, *Liber de excellentibus ducibus exterarum gentium*, VIII. THRASYBULUS, 1, 1.
- (7) Cornelius Nepos, *op. cit.*, VIII, 1, 2.
- (8) *Ibid.*

- (9) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 2.
- (10) *Ibid.*, II, iv, 3.
- (11) *Ibid.*, II, iv, 5.
- (12) *Ibid.*, II, iv, 6.
- (13) *Ibid.*, II, iv, 7.
- (14) *Ibid.*, II, iv, 8.
- (15) *loc. cit.*
- (16) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 9.
- (17) *Ibid.*, II, iv, 10.
- (18) *loc. cit.*
- (19) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 11.
- (20) 「エウリュポンの息子、ミレトスのヒッポダモスは都市計画 (he poleon diairesis) を考案した人で、ペイライエウスの区画整理をした人である。」(cf. Aristoteles, *Politica*, II, 8, 1267b22-23.)
- (21) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 11.
- (22) *Ibid.*, II, iv, 12.
- (23) *loc. cit.*
- (24) *Ibid.*
- (25) cf. Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 14, 41.
- (26) Xenophon, *Historia Graeca*, II, iv, 13.
- (27) *Ibid.*, II, iv, 14. ‘epidemountes’ の解釈は Loeb 版 Brownson で ‘but were not even in the city’, Budé 版 Hatzfeld で ‘ils ne se trouvaient meme pas a Athène’ といういずれの場合も ‘ephygadeuometha’ に掛けて「アテナイに不在」と解しているが、筆者はそうとらず、‘epidemountes’ を「一時滞在の外人」と解する。従って筆者の解釈を敷衍すれば、「一時滞在の外人でもないのに不法にも国外追放された」となる。cf. P. Gauthier, *SYMBOLA, les, étrangers et la justice dans les cités grecques*, Nancy 1972, p. 109.
- (28) *Ibid.*, II, iv, 15.
- (29) *Ibid.*, II, iv, 16.
- (30) *Ibid.*, II, iv, 17.
- (31) *loc. cit.*
- (32) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 19.
- (33) *loc. cit.*
- (34) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 20.
- (35) *Ibid.*, II, iv, 21.
- (36) *Ibid.*, II, iv, 22.
- (37) *loc. cit.*
- (38) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 23.
- (39) *loc. cit.*
- (40) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 24.
- (41) *loc. cit.*
- (42) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 25. 「彼らの間には明らかに奴隷も混じっていた」とアリストテレスは伝える。cf. Aristoteles, *Atheniensium Respublica*, 40.

- (43) *loc. cit.*
- (44) *Ibid.*
- (45) Aeschines, *op. cit.* 194. この事件に関する文献については、P. T. Rhodes, *A Commentary on the Aristotelian Athenian Politeia*, pp. 474-477, を参照。
- (46) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 25.
- (47) *Ibid.* II, iv, 26.
- (48) *Ibid.* II, iv, 27.
- (49) *loc. cit.*
- (50) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 28.
- (51) *loc. cit.*
- (52) *Ibid.*
- (53) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 29.
- (54) *loc. cit.*
- (55) *Ibid.* なお、ここで「遠征軍」と訳された 'phroura' はスパルタにおいて即座に召集可能な体勢にある市民団を意味するが、ここでは内容をとって意識した。
- (56) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 30.
- (57) *loc. cit.*
- (58) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 31.
- (59) *Ibid.*, II, iv, 32.
- (60) *Ibid.*, II, iv, 33.
- (61) *loc. cit.*
- (62) *Ibid.*
- (63) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 34.
- (64) *loc. cit.*
- (65) *Ibid.*
- (66) Xenophon, *op. cit.* II, iv, 35.
- (67) *loc. cit.*
- (68) *Ibid.*
- (69) *Ibid.*
- (70) *Ibid.*
- (71) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 36.
- (72) *loc. cit.*
- (73) *Ibid.* なお、ここに見えるメレトスはやがてソクラテス告発に乗り出す人物である。
- (74) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 37. 市域から第二次使節が派遣されたのは、ペイライエウス側の提案に「異議を唱える (contre-carrer)」ためであろうと Hatzfeld は推測している。cf. J. Hatzfeld, *Xénophon Helléniques*. (I-III), Paris 1973, p, 163.
- (75) *loc. cit.*
- (76) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 38.
- (77) *loc. cit.* この十人は「三十人と同じような残虐を行使した (superioris more crudelitatis erant usi)」とされる。cf. Cornelius Nepos, *op. cit.*, VIII, 3.
- (78) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 39.
- (79) *loc. cit.*

- (80) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 40.
- (81) *Ibid.*, II, iv, 41. 引用中「負かされた」は Mss 'perielelythen' を読むが, MSS 'perielelasthe' を読めば「追いまわされた」となるが, 内容には響かない。
- (82) *Ibid.*, II, iv, 42.
- (83) *loc. cit.*
- (84) Xenophon, *op. cit.*, II, iv, 43.
- (85) *loc. cit.* 「過去の怨恨を持ち越さない」とは「忘却 (oblivio)」に他ならず, Nepos はこの法を「忘却の法 (lex oblivionis)」と呼び (*cf.* Cornelius Nepos, *op. cit.*, VIII, 3), Valerius Maximus はそれが「大赦令 (amnestia, i. e. ἀμνηστία)」と呼ばれたとする (*cf.* Loeb C. L., *C. Nepos*. Harvard UP, 1984, p. 98.)。
- (86) Plato, *Protagoras*, 343b4-5.
- (87) 注(27)を参照。
- (88) 注(30)を参照。
- (89) 同上。
- (90) 注(80)を参照。
- (91) 同上。
- (92) 同上。
- (93) 注(81)を参照。
- (94) 同上。

La Seconde Note sur le Portrait des Hommes
Dans une Situation Critique
—Xenophontis, *Historia Graeca*, II, iv—

Ikuo FUJISAWA*

RÉSUMÉ

Mon petit essai est une tentative qui vise à tracer les grandes lignes de l'image des hommes dans une situation critique. Il apparaît une pareille situation avec l'apparition des Trente, *c.-à.-d.* à Athènes les trente tyrants (hoi triakonta) à la fin du V^e siècle avant Jésus-Christ, dans laquelle Thrasybule joue un rôle important.

Thrasybule, proscrit par les Trente, se réfugie à Thèbe, d'où il revient avec soixante-dix bannis, s'empare de Phylé, de Mounichie et du Pirée, où Critias est tué. Il force les Trente à se réfugier à Eleusis.

Entré à Athènes, il restaure la démocratie (à citer la phrase de Cornelius Nepos : *in libertatem vindicaret.*) D'une part adversaire de Sparte, d'autre part modéré à l'égard des oligarques, il fait proclamer une amnistie (*ἀμνηστία*). C'est ce qu'il a fait.

Mon petit essai veut en extraire et traiter les éléments fondamentaux de la condition humaine, qui ont quelque rapport avec la morale au sens large du terme, par l'intermédiaire de deux discours faits par Thrasybule.

* Division of Social Studies